九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ダルマキールティによる『集量論』I9の解釈 : 『量評釈』III320 - 352の分析

片岡, 啓
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門

https://doi.org/10.15017/19823

出版情報：哲學年報. 70, pp.43-75, 2011-03-01. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

ダルマキールティによる『集量論』I 9の解釈

―『量評釈』III 320-352の分析* ―

片　岡　　啓

はじめに

「あるいはここで自己認識が結果である」という文句に始まるディグナーガの *Pramāṇasamuccaya*（『集量論』）I 9および自註（PSV）は多くの問題をはらむ。PS(V) I 9、細かく言えば、PS(V) I 9a, 9b, 9c[(1)], 9d という各部分でのディグナーガの立場は、唯識なのか経量部なのか、はたまた両者に共通する見解なのか。注釈者の意見は分かれ、現代研究者の意見も分かれる[(2)]。

ダルマキールティ流の解釈を基本的に踏襲しながらディグナーガを読み替えていく PSṬ作者のジネーンドラブッディによれば、次のように PS(V) I 9は分節される。比較のため前後の8cd, 10も挙げておく。

PS(V)	
I 8cd	経量部$_1$
I 9ab	経量部$_2$＋唯識
I 9cd	経量部$_2$
I 10	唯識

重要なのは、「あるいは」として I 9ab で新たな選択肢として導入される立場が唯識と経量部に共通の立場であるということである。しかも、そこで導入される経量部は、I 8cd での経量部の立場とは異なる。I 8cd での経量部（以下、経量部$_1$と呼ぶ）は（外界）対象認識(arthasaṃvit)を結果（認識手段によって実現される認識結果）とする立場である。これにたいして I 9ab で唯識とともに導入される立場は、外界対象の認識ではなく、認識それ自身の認識、すなわち「自己認識が結果である」とする立場である[(3)]。

Ⅰ 9ab で明らかとなるように、自己認識を結果とする新たな立場は、唯識と経量部$_2$に共通する立場である。しかし、認識手段の設定に関して、両者は異なる。それがⅠ 9cd で明らかとなる。「ただし経量部$_2$においては、経量部$_1$と同じく、〈対象の現れを持つこと〉が認識手段となるのであって、唯識のように〈把握主体の形象〉が認識手段となるわけではない」というのが、ジネーンドラブッディの解釈するⅠ 9cd の趣旨である(4)。つまりⅠ 9cd は、Ⅰ 9ab への但し書きとして解釈される(5)。いっぽう〈把握主体の形象〉を認識手段とする唯識の立場については、Ⅰ 10で明らかにされる。以上が、ジネーンドラブッディのディグナーガ解釈である。これは、戸崎［1979］［1985］のダルマキールティ研究から確認されるように、ダルマキールティの解釈を受けたものである。すなわち、「従来の」PS Ⅰ 9解釈というのは、以下のような表にまとめられる(6)。

PS(V)	立場	認識手段	結果
Ⅰ 8cd	経量部$_1$	対象の現れを持つこと	対象認識
Ⅰ 9ab	経量部$_2$＋唯識		自己認識
Ⅰ 9cd	経量部$_2$	対象の現れを持つこと	
Ⅰ 10	唯識	把握主体の形象	自己認識

しかし、このような解釈はあくまでもダルマキールティに従ったディグナーガ解釈である。ディグナーガ自身の意図と異なる可能性があることに注意する必要がある。ジネーンドラブッディの PSṬ のサンスクリット原典の公刊(2005年)、および、それに基づいたより精度の高いディグナーガの PS(V) 本文の梵語還元（2005年）により、従来と状況は変わった。ダルマキールティと独立して、ディグナーガの真意を原文（に近いもの）に探ることが可能となったのである。

筆者は既に、ディグナーガとジネーンドラブッディを読み比べることで、両者にズレのあることを指摘し、ディグナーガの立場として以下の可能性を指摘した（片岡［2009］）。

１．ディグナーガにおいて、Ⅰ 9ab で導入されるのは唯識の立場であって、

経量部ではない。すなわちI 9ab の立場は、唯識のみであって、経量部$_2$に共通する立場ではない。

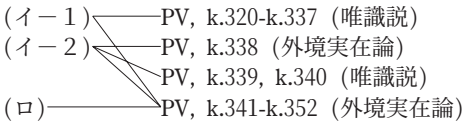
2．ディグナーガにおいて、経量部として考えられているのは外界対象認識を結果とする立場（経量部$_1$）のみであり、自己認識を結果とする経量部$_2$のような立場はそもそも想定されていない。

前稿を受けた本稿では、ダルマキールティの解釈を取り上げる。実際には、ダルマキールティの解釈自体、PV 注釈者間で意見の分かれるところであり、現代研究者も 異なる可能性を指摘している。しかし、戸崎［1985］の研究が基本的参照点であることに変わりはない。本稿も戸崎［1985］の理解を「先行研究」の代表として取り上げる。ただし本論考では、「PV はディグナーガの PS(V)への注釈である」という視点から PV を読み直す。後代の注釈に惑わされることなく、ダルマキールティが PV という注釈を著した時点に戻って問題を整理する。ダルマキールティはディグナーガをどのように解釈したのか、そして、ディグナーガとは異なるどのような見解を導入したのか。このような問題意識からダルマキールティの注釈を洗い直す。予め、筆者の理解を表にしておくと以下となる。筆者の重要な主張点については太字で強調しておく。

	PS(V)	PV III		
経量部(1)	I 8cd	301-319	経量部$_1$	認識手段と結果との非別
唯識	I 9a	320-337	唯識	自己認識が結果
		338	経量部$_2$	自己認識が結果
唯識	I 9b	339-340	唯識	対象確定＝自己認識
		341-345	経量部$_2$	自己認識に従って対象確定
経量部(1)	I 9c	346	経量部$_2$	対象形象を持つことが認識手段
経量部(1)	I 9d	347-352	経量部$_2$	対象認識＝自己認識

すなわち、ディグナーガ自身の見解としては、PS(V) I 9ab は唯識と経量部に共通の立場ではなく唯識のみに帰すべきである。また、I 9cd の経量部は経量部$_1$であって経量部$_2$ではない。言い換えれば、I 8cd の経量部と同じ立場と解釈すべきである。さらに、ダルマキールティによる註釈に関して戸

崎［1985: 2］は、I 9a の註釈として PV III 320-337を配当し、338についてはI 9b への註釈としている。戸崎［1985: 2］の掲げる表は以下の通りである。



しかし、338はI 9a への註釈とするのが適切である。以下では、PS(V) I 9 への注釈である PV III 320-352を、それぞれの分節毎に検討する。特に、問題となる338については、後続する339-340と341-345で述べられる唯識、経量部$_2$という二つの見解を明らかにした上で、338をどこに帰属させるべきかを検討する。

PV III 320-337

戸崎［1985: 2］は、PV III 320-337を、唯識の立場からの言明とする。しかし、これは、よく考えると奇妙である。まず、PV III 320-337は、PS I 9a: svasaṃvittiḥ phalaṃ vātra（および自註）への注釈であることは、容易に分かることであり、既に認められているところである（戸崎［1985: 2]）。そして、自己認識を結果として認める立場が、経量部$_2$と唯識に共通する立場であることも、既に認められていることである。すなわち、PS(V) I 9a への注釈である PV III 320-337を、唯識**のみ**に帰することは、「自己認識を結果として認める」という立場を経量部$_2$と唯識に共通して認めるという一般的理解と齟齬をきたすのである。

PSV I 9a	PV III 320-337
経量部$_2$＋唯識	唯識

PS(V) I 9a でディグナーガは、自己認識が結果であるということ、および、認識が二つの形象を持つということを主張していた。これを受けてダルマキールティは次のような議論を展開する(7)。

1 外界対象認識の否定……320a
1.1 〈対象の形を持つこと〉の否定 ……320-322
1.2 〈対象に似て生じること〉の否定 ……323
1.3 〈決定する認識〉の否定……324abc
1.4 所見と見との近接 ……324d-325
2 認識自身が経験される ……326
2.1 認識以外に経験されるものはない ……327a
2.2 認識を別の認識が経験することもない……327bc
2.3 認識は自ら輝き出す ……327d
2.4 認識は青等の相を持つので「青等の経験」と呼ばれる……328
2.5 「自身を輝かせる」と言うことに問題はない ……329
3 所知・能知の区分の仮設 ……330-332
4 外界対象が経験されることはない ……333
4.1 外界対象の形象を持つ認識の検討……334
4.2 見は内的な青の現れ出しを持つ……335
4.3 内的潜在印象を覚醒させるのは外界対象ではない……336
4.4 二相を持つ認識が経験される・想起される……337

困ったことに、ここにあるのは明らかに唯識説でしかない。§1.1や§1.2では、経量部の外界対象認識説が批判されている。また、§4.3は外界対象がなくても内的な潜在印象を覚醒する「何らかのもの」(kiṃcit)により「認識にたいする制限」(dhiyāṃ viniyamaḥ)が可能であることを説明する。すなわち、外界対象がなくとも、認識が特定のものの認識たりうることを説明するものである。これは、『唯識二十論』の場所・時間などの特定性の議論を受けたものであり、唯識の立場を説明するものでしかありえない。また、この§４全体の問題設定を行う§4.1は次のように述べる。

yadi buddhis tadākārā sāsty ākāraviśeṣiṇī/
sā bāhyād anyato veti vicāram idam arhati// 334
もし認識がそれ（対象）の形象を持つならば、それ（認識）は、形象を

限定者として持つものとして存在することになる。そのような［認識］は、外界に基づくのか、それ以外に基づくのか、このことを考察すべきである。

ここでは、有形象認識説を共通土台として認めたうえで、経量部の外界実在論と唯識の外界否定論といずれが正しいのかが議論の俎上に載せられている。この問題設定から明らかなように、§４では、経量部説を批判して、唯識説が採用されるという構図になっている。

以上から、ダルマキールティがPV III 320-337というPS I 9aへの注釈を、唯識の立場からのみ記述していることが確認できた。従来の解釈は正しいのである。

いっぽう、ダルマキールティに忠実なはずのジネーンドラブッディは、PS I 9aを、経量部$_2$と唯識に共通するものとして解釈している。また後述するように、ダルマキールティはI 9bおよびI 9cdへの注釈で「自己認識が結果である」とする理解を経量部$_2$のものとして展開する。したがって、ダルマキールティ自身、PS I 9aのsvasaṃvittiḥ phalaṃ vātraを、経量部$_2$にも共通する言明として解釈していたことは間違いない。

したがって、我々としては、PS(V) I 9aへの注釈であるPV III 320-337を唯識だけに帰属させること、および、PS(V) I 9aが経量部$_2$と唯識に共通する見解であること、この両者の齟齬を解消する必要がある。

その鍵は、後続するPV III 338にある。すなわち、従来（戸崎［1985: 2］）PS(V) I 9bへの注釈と理解されてきたPV III 338をPS(V) I 9aへの注釈と見なした上で、経量部$_2$に帰属させれば問題は解消することになる。そして、この解決方法は、PS(V) I 9bへの注釈として三区分を考えてきた従来の理解の不具合を訂正することにもなる。

従来の解釈			筆者の解釈		
PS(V)	PV III		PS(V)	PV III	
I 9a	320-337	唯識	I 9a	320-337	唯識
				338	経量部$_2$
I 9b	338	経量部$_2$			
	339-340	唯識	I 9b	339-340	唯識
	341-345	経量部$_2$		341-345	経量部$_2$

以下では、問題の PV III 338に後続する詩節の検討から始める。

PV III 339-340

PV III 339-340が PS I 9b: tadrūpo hy arthaniścayaḥ（および自註）への注釈であることは表現の対応からも一目瞭然である。PS(V)への注釈として PV を眺める時、339と340を切り離す解釈（プラジュニャーカラグプタ他の解釈）には無理がある[8]。

PS(V) I 9b:
tadrūpo hy arthaniścayaḥ(b)/ PS I 9b
yadā hi saviṣayaṃ jñānam(a) arthaḥ, tadā svasaṃvedanānurūpam arthaṃ pratipadyata iṣṭam aniṣṭaṃ vā(c).[9]

PV III 339-340:
yadā saviṣayaṃ jñānaṃ(a) jñānāṃśe 'rthavyavasthiteḥ/
tadā ya ātmānubhavaḥ sa evārthaviniścayaḥ(b)//[10]
yadīṣṭākāra ātmāsyā anyathā vānubhūyate/
iṣṭo 'niṣṭo 'pi vā(c) tena bhavaty arthaḥ praveditaḥ//[11]

対応する下線部(a)およびその理由説明である「認識の一部を対象として立てるので」(jñānāṃśe 'rthavyavasthiteḥ)から、「認識が対象を伴っている場合」というディグナーガの文章を、ダルマキールティが唯識の立場から説明していることが分かる。ジネーンドラブッディは saviṣayaṃ jñānaṃを「対象とともに認識が［対象である場合］」と解釈するが[12]、そのような無理な解釈は、いまだダルマキールティには見られない。彼は明らかに素直に「対象を伴った認識」と解釈している。すなわち、対象像を内蔵した認識が対象である場合と解釈している。

下線部(b)および連関部分から、「対象確定がそれ（自己認識）［に従った］形を持つ」という原文を、ダルマキールティが、「自己認識を本質とする」と解釈していることが分かる。すなわち、PS I 9b の-rūpa について、ダル

マキールティは、PSV から明らかになるディグナーガの本意のように「に従った形で／に従った形の」(anurūpa)ではなく、「～を本質とする」と解釈していることが確認できる。339cd の ya ... sa eva は、そのような意味でしか解釈できない。

ディグナーガ：　　自己認識［に従った］形を持つのが対象確定
ダルマキールティ：自己認識がそのまま対象確定である

以上から、自己認識がそのまま対象確定なので、認識内形象が望ましい形を取れば、望ましいものとして対象が認識させられることになり、逆に、認識内形象が望ましくない形を取れば、望ましくないものとして対象が認識させられることになるという説明が得られることになる。以上に関して、ディグナーガとダルマキールティとの理解差は、余り大きくない。同じ唯識について説明している以上、それほど大きく違う動機はないからである。

PV III 341-345

既に述べたように、ディグナーガは PS I 9ab を唯識の立場からのみ意図している。これにたいしてダルマキールティは、「自己認識が結果である」とする立場を経量部$_2$と唯識に共通する立場と理解する。したがって、PS I 9b について、唯識のみならず、経量部$_2$の立場から解釈する必要がある。それが上の素直な唯識解釈に後続する PV III 341-345の経量部$_2$解釈である。PS I 9b との対応は明らかである。

PS(V) I 9b:
tadrūpo hy arthaniścayaḥ$_{(b)}$/ PS I 9b
yadā hi saviṣayaṃ jñānam arthaḥ, tadā svasaṃvedanānurūpam$_{(b)}$ arthaṃ pratipadyata iṣṭam aniṣṭaṃ vā.[13]

PV III 341, 345:
vidyamāne 'pi bāhye 'rthe$_{(a)}$ yathānubhavam eva saḥ/

niścitātmā(b), svarūpeṇa nānekātmatvadoṣataḥ//(14)
tasmāt prameye bāhye 'pi(a) yuktaṃ svānubhavaḥ phalam(c)/
yataḥ svabhāvo 'sya yathā tathaivārthaviniścayaḥ(b)//(15)

まず下線部(a)「外界対象が存在する場合でも」「外界が認識対象である場合も」から、これが上の唯識の立場と並べられた経量部の立場であることが確認できる。

下線部(b)から、「自己認識に従って対象確定がある」という解釈が確認できる。すなわち、ダルマキールティは、ここで-rūpa を、ディグナーガの原意と同じく「～に従った形で」「～の通りに」(yathā ... tathā)と理解している。

以上から、経量部の立場においても、自己認識が結果であるという解釈を、PS I 9b への注釈としてダルマキールティが意図していることが確認できる。

PV III 338

以上、PS I 9b への注釈である PV III 339-340 (唯識), 341-345 (経量部$_2$)について、対応が確認できた。残る問題は、両者の前に置かれた PV III 338である。PS I 9ab 全体は、ダルマキールティの解釈によれば、経量部$_2$と唯識に共通する立場からのものである。先行する PV III 320-337は唯識のものでしかなかった。したがって、順当に考えれば、PS I 9a への注釈である PV III 338は、経量部$_2$の見解のはずである。

PSV	PV III	
I 9a	320-337 (唯識)	**338 (経量部$_2$)**
I 9b	339-340 (唯識)	341-345 (経量部$_2$)

まず PV III 338が経量部のものであることは外界対象を認める内容 (後述) から明白である。ではそれは外界対象認識を結果とする経量部$_1$の立場からの言明なのか、あるいは、自己認識を結果とする経量部$_2$の立場からのものなのか。まずは実際に原文を検討する。

PS(V) I 9a:

svasaṃvittiḥ phalaṃ vātra/ PS I 9a

dvyābhāsaṃ hi jñānam utpadyate svābhāsaṃ viṣayābhāsaṃ ca.

tasyobhayābhāsasya yat svasaṃvedanaṃ tat phalam.(16)

PV III 338:

yadā niṣpannatadbhāva iṣṭo 'niṣṭo 'pi vā paraḥ/

vijñaptihetur viṣayas, tasyāś cānubhavas tathā//(17)

上述したように、PS(V) I 9b に内容上・表現上対応するのは PV III 339-340 (yadā saviṣayaṃ jñānaṃ ...) および、PV III 341 (... yathānubhavam eva saḥ/ niścitātmā)である。それぞれ唯識の立場、経量部$_2$の立場からのものである。PV III 338は、明らかにそれらに対応した構造を持つ。すなわち、PV III 339-340, PV III 341-345で展開される唯識、経量部$_2$に対応した始まりを持つ。その意味では、先行研究（戸崎［1985: 22, n.71]）がそう看做したように、PS I 9b への注釈と考えてもよさそうに見える。

PS I 9b	yadā hi saviṣayaṃ jñānam arthaḥ
PV 338	yadā ... paraḥ vijñaptihetur viṣayas ...
PV 339-340	yadā saviṣayaṃ jñānaṃ ...
PV 341	vidyamāne 'pi bāhye 'rthe ...

まず重要な点として、PV III 338の立場が経量部であることを示唆する点として、「他が認識原因として対象である場合」(yadā ... paraḥ vijñaptihetur viṣayas)と明言されていることが挙げられる。「他」とは認識とは異なる「他」であり、要するに外界対象のことである。つまり、ここでは外界対象を認めている。したがって経量部である。唯識と解釈するプラジュニャーカラグプタの解釈（cf. 村上［2006]）には明らかに無理がある。

しかし、それが、経量部$_2$である保証はどこにあるのか。重要なのは、tasyāś cānubhavas tathā の解釈である。ca をどう解釈するかは問題であるが、いったんそれを無視するとしても「それ（vijñapti, 認識）の経験がその通りである」という趣旨のことが言われていることは確実である。

問題は、「認識の経験」という時、「認識が経験する」のか「認識を経験する」のか、いずれを意図しているのかということである。しかし経験する主体は認識に決まっており、わざわざ表明するまでもないことである。したがって表明する必要があるのは後者である。つまり「その通りに認識を経験する」ということが、ここで言われている。外界対象が直接に認識されるわけではなく、認識内形象という認識が経験されるという意味で「認識が経験される」ということである。「他（外界対象）が認識原因として対象である場合」(vijñaptihetur viṣayas)という「対象」の説明も、外界対象は「認識の原因」ではあるが、直接に接して認識される対象ではないという経量部の立場を断ったものと解釈することで合点がいく。

いっぽう「その通りに」とは、「望まれたもの、あるいは、望まれてないものとして」という意味でしかない。すなわち、ここでは、「外界対象の通りに」ではなく「自己認識の通りに」認識が経験されるということが言われていることになる。

とすると ca というのは、二つの主張を指していると解釈することができる。外界対象が認識原因としての対象であるという経量部に立つ場合、1.実際に直接経験されるのは外界対象ではなく認識であるということ。2.そして外界対象の通りにではなく自己認識の通りに認識されるということである。

yadā ... paraḥ vijñaptihetur viṣayas	外界対象が認識原因と して対象である場合
1. tasyāś cānubhavas	認識が経験される
2. [anubhavas] tathā	経験はその通りである

つまり、ここで意図されているのは、経量部[2]の立場における「自己認識が結果である」ということの説明である。つまり、外界対象ではなく認識が経験されているということである。これは、PS(V) I 9a への注釈であった PV III 320-337（唯識）の問題意識と同じものである。例えば327a には「それゆえ［認識より］他に経験されるべきものは存在しない」とあり、また、337cd には「二つの形象を持つこれ（認識）を意識することが結果である」とある。いずれも外界対象ではなく認識それ自身が認識されることを謳っている。

327a:　nānyo ’nubhāvyas tenāsti

337cd:　ubhayākārasyāsya saṃvedanaṃ phalam

338d:　tasyāś［=vijñapteś］cānubhavas tathā

iṣṭo ’niṣṭo ’pi vā など、確かに PV III 338は PS I 9b への注釈に位置するかに見える表現を含む。しかし、この解釈は問題をはらむ。PV III 338を PS I 9b への注釈とし、経量部$_2$とする説明では、PV III 341-345と内容的に重複してしまうのである。逆に PS I 9a への注釈とすれば、注釈としてのバランスが取れることになる。すなわち、I 9a にたいしても I 9b にたいしても、唯識と経量部$_2$の双方の立場から「自己認識が結果である」とする立場をダルマキールティは説明したことになる。逆に、従来の解釈ではこのバランスが崩れてしまうのである。また、PV III 338冒頭の yadā ... paraḥ ... viṣayas という文句は、PV III 320-337の唯識説にたいして経量部説では、という対比のための導入文と解釈できる。

	従来説	筆者の説
I 9a	320-337	320-337
		338
I 9b	338	
	339-340	339-340
	341-345	341-345

以上から、PV III 338が経量部$_2$の立場からの言明と考えて問題のないことが明らかとなった。

では、戸崎［1985: 23, n.79］所引のデーヴェーンドラブッディ（および＊印のシャーキャブッディの補足説明）の説明はどのように解釈すればよいのか。すなわち「それ（＝第338偈）は、対象相似性が量であり、**『対象の領納』が果であること**、すなわち外境対象が実在（するとみなす）第二の解釈（――所知が内にあるという主張における『果に関する解釈』〈唯識説〉に対して第二*――）を述べている」（太字強調は筆者）とデーヴェーンドラブッディは説明する。ここでは、自己認識ではなく対象認識が結果だと明言されている。すなわち経量部$_1$の立場であるかのように見えるのである。

		認識手段	結果
338	経量部$_1$	対象の形象を持つこと	**対象認識**
339-340	唯識	把握主体の形象	自己認識
341-345	経量部$_2$	対象の形象を持つこと	自己認識

しかし、「(外境) 対象が認識されているかのように増益 (āropa) されて、『それ (＝外境対象) を領納する』と言説 (vyavahāra) される」というシャーキャブッディの説明 (戸崎 [1985: 23, n.78] 所引) から示唆されるように、勝義においては自己認識が結果、世俗においては外界対象認識が結果という両義的な立場を示していると考えられる。シャーキャブッディを敷衍して戸崎 [1985: 23] も「このように実際に生じるのは自証ではあるが、人々はあたかも外境対象を認識しているかのように執する。それゆえに、「外境対象の認識」ともいわれる」と述べている。したがって勝義的な意味において、PV III 338が経量部$_2$の立場からのものであると考えることに問題はない。両義性を許すデーヴェーンドラブッディの説明は、経量部$_1$しか念頭に置いていないディグナーガの記述の会通を意図したダルマキールティの解釈 (後述の PV III 347-352) を先取りしたものと思われる。

世俗	経量部$_1$	外界対象認識が結果
勝義	経量部$_2$	自己認識が結果

外界対象認識を結果とする経量部$_1$だけを念頭に置くディグナーガの PS I 9 (特に経量部$_1$の記述である PS(V) I 9cd) には、経量部$_2$と読み替えるには不都合な箇所がある。例えば PS I 9c への導入句「いっぽう外界のものに他ならない対象が認識対象である場合」(PSV 4.8: yadā tu bāhya evārthaḥ prameyaḥ)である。外界対象認識を結果とするかのようなディグナーガの記述を会通するためには、世俗として経量部$_1$を取り込む必要があった。ダルマキールティおよび註釈者達は、経量部$_2$の立場から PS I 9を再解釈するにあたって、ディグナーガの記述に明らかな経量部$_1$の立場を、世俗 (転義的用法) として取り込む必要に迫られたのである。

PV III 346

本来、経量部$_1$の立場を説明するものであったPS I 9cdを、ダルマキールティは経量部$_2$と読み替えた。次に、PS I 9cdをダルマキールティがどのように解釈したのかを見ていく。PS(V) I 9cへの注釈がPV III 346であることは、表現・内容から明らかである。

PS(V) I 9c:

yadā tu bāhya evārthaḥ prameyaḥ, tadā(a)
viṣayābhāsataivāsya pramāṇaṃ
tadā hi (b)jñānasvasaṃvedyam api svarūpam anapekṣyārthābhāsataivāsya pramāṇam.[18]

PV III 346:

(a)tadārthābhāsataivāsya pramāṇaṃ na tu sann api(b)/
grāhakātmāparārthatvād bāhyeṣv artheṣv apekṣyate(b)//[19]

「外界対象が認識対象である場合」という下線部(a)の対応から、ディグナーガもダルマキールティも経量部からのものと理解していることが確認できる。ただしディグナーガにとっては、ここでの経量部はあくまでも経量部$_1$であって、経量部$_2$ではない。〈外界対象認識〉という結果にたいして、〈対象の現れを持つこと〉が認識手段になるという趣旨である。

これにたいしてダルマキールティは、経量部$_2$の立場で、唯識と同じように自己認識が結果であっても、認識手段に関しては唯識とは異なり、把握主体としての自体(grāhakātmā)ではなく、〈対象の現れを持つこと〉が認識手段となる、と解釈する。

	認識手段	結果
経量部$_1$	対象の現れを持つこと	対象認識
経量部$_2$	**対象の現れを持つこと**	自己認識
唯識	把握主体の形象	自己認識

問題となるのは、下線部(b)である。ディグナーガの原文には「認識によって自己認識されるが、そのような認識それ自体を考慮することなく」とある。下線部(a)にあるように、経量部においては、外界対象そのものが認識対象である。ここで認識は、外界対象に向かう（←）と同時に、それ自身にも向かう（↷）ので、二つの働きを同時に有する。すなわち、認識は、外界対象認識と自己認識の両側面を持つ。

↷

対象　←　認識

あらゆる認識は、分別も含めて、自己認識という点では知覚とも見なせる。このことはディグナーガ自身が PS 1.7ab で明らかにしたところである。いま、経量部における認識手段として立てられる「対象の形象を持つこと」(arthābhāsatā)というのは、この二つの働きのうち外向きの働き（←）についてであって、内向きの働き（↷）についてではないということを、ディグナーガはここで断っている。すなわち「[認識] それ自身を考慮せずに」(svarūpam anapekṣya)というのは、ここでは、外界対象について「対象の現われを持つこと」が認識手段として述べられているという意味である。「認識それ自身という対象について」ではないという意味である。

しかし、ディグナーガの原意をそのまま生かすことは、ダルマキールティにとっては都合が悪い。ディグナーガのように、PS I 9ab を唯識、PS I 9cd を経量部から記述する場合には、PS(V) I 9c 冒頭の「いっぽう外界のものに他ならない対象が認識対象である場合には」における tu という対比は意味を持つ。

I 9b:　対象を伴った認識が対象である場合（唯識）
I 9c:　いっぽう外界対象が認識対象である場合（経量部）

「いっぽう経量部の場合、認識手段は〈把握主体の形象〉ではなくて〈対象の現れを持つこと〉である」と言うのはディグナーガの原文においては意

味をなす。しかし、ダルマキールティにおいては、PS I 9ab を経量部$_2$と唯識に共通する立場、すなわち、自己認識を結果として立てる立場として解釈していた。したがって経量部の解説をした後に「いっぽう経量部では」と始めることになってしまう。これは、このままでは都合が悪い。

I 9ab: 自己認識が結果である（唯識＋経量部$_2$）
I 9c: いっぽう外界対象が認識対象である場合（経量部$_2$）

したがって、唯識・経量部$_2$の共通の立場と対比的に経量部$_2$からのものとして PS I 9c を描くには一工夫が必要である。その結果として生み出されたのが、経量部$_2$においては、唯識と同じく自己認識が結果であるが、ただし、認識手段は唯識とは異なり、〈対象の現れを持つこと〉である、という但し書きとして PS(V) I 9c を解釈する手法である[20]。

I 9ab: 自己認識が結果である（唯識＋経量部$_2$）
I 9c: ただし把握主体の形象ではなく対象の現れを持つことが認識手段である（経量部$_2$）

ダルマキールティの無理は、ディグナーガの原文に照らして明らかである。ダルマキールティは、「認識によって自己認識されるにもかかわらず」という部分を、「「把握主体としての自体は存在するにもかかわらず」と言い換える。

PSV ad I 9c: jñānasvasaṃvedyam api svarūpam
PV III 346: **sann api** grāhakātmā

ディグナーガの「[認識それ] 自体」(svarūpa)を、ダルマキールティが「把握主体としての自体」(grāhakātmā)と解釈しているのは明らかである。したがって、素直に注釈するならば、「把握主体としての自体（＝把握主体の形象）が自己認識されるにもかかわらず」(*jñānasvasaṃvedyo ’pi grāhakātmā

[=grāhakākāraḥ])という趣旨のことを述べてもよかったはずである。しかしそのようには述べず、「自己認識されるにもかかわらず」の代わりに「存在するにもかかわらず」と述べている。

これは、「把握主体の形象（＝見分）が自己認識される」という言い方がおかしいことに気が付いていたからであろう。「認識それ自体が自己認識される」という言い方はするが、「見分が自己認識される」という言い方はしないからである。通常の唯識的な表現では、相分を見分が捉えることそれ自体が自己認識だからである。「把握主体の形象」「把握主体としての自体」という発想を持ち込んだことで、ディグナーガの原文にある「自己認識される」という部分の説明が苦しくなっていることが確認できる。

PV III 347-352

PV III 347-352と PS(V) I 9d の対応は、次のような文脈上にある。PSV ad I 9d は、外界の通りに対象が認識されることを述べる。いっぽう PSV ad I 10 は、同じ一つの認識が、認識手段や結果として転義的に表現されることを述べる。PSV I 9c, 10も含めてディグナーガの文脈を再確認しておく。

PSV I 9c: 経量部では〈対象の現れを持つこと〉が認識手段
PS I 9d: なぜなら外界対象はそれにより認識されるから
PSV I 9d: というのも認識に入り込んだ通りの対象が認識されるから
PSV I 10: 以上のように認識の様々な捉え方に応じて手段・対象の仮設があるが実際に作用があるわけではない。

ダルマキールティは PSV I 9d を説明した後、後続部では、自己認識が結果であるにもかかわらず、外界対象を認識していると言えること、したがって、認識手段と結果の向かう先にズレのないことを理由づける。前半と比べると後半に関して PSV との表現上の顕著な対応は見られない。後半に関して量的にも、ディグナーガからダルマキールティに至って議論が大きく発展・展開していることが予想される。

PSV	PV III	
4,11-14	347abc	対象が入ってきた通りに確定
	347cd-348ab	対象認識は自己認識
	348cd-350a	手段と結果で向かう先にズレはない
	350b-352	外界対象認識と自己認識の齟齬回避

今は前半（および若干の関連する後半部分）を問題とする。

PSV I 9d:
yasmāt so ’rthaḥ
tena mīyate//
yathā yathā hy arthākāro jñāne sanniviśate（sanniviśate］*emend*.; pratibhāti *ed*.）śubhrāśubhrāditvena（śubhrāśubhrāditvena］*emend*.; śubhāśubhāditvena *ed*.), tattadrūpaḥ sa viṣayaḥ pramīyate.[21]

PV III 347-348ab:
yasmād yathā niviṣṭo ’sāv arthātmā pratyaye tathā/
niścīyate, niviṣṭo ’sāv evam ity ātmasaṃvidaḥ//
ity arthasaṃvit saiveṣṭā yato ’rthātmā na dṛśyate/[22]
PV III 349cd-350a:
arthasthites tadātmatvāt svavid apy arthavin matā/
tasmād viṣayabhedo ’pi na[23]

PS と PV III 347abc との対応は明らかである。しかし、その真意と強調点は、ディグナーガとダルマキールティとでは異なる。経量部（経量部$_1$）から記述するディグナーガにとって、ここでの結果は外界対象認識であって自己認識ではない。したがって、対象の形象を持つことが外界対象に向かう認識手段であるのと同様、結果も外界対象に向かっていることを説明しなければならない。すなわち、認識手段と結果の向かう先が同一でなければならない。客観的に存在する外界対象は、そのままに認識内に入り込み、その通りに認識される。ここでのポイントは、外的形象と内的形象の相似である。

これによって、実際には内部を認識しているにもかかわらず、外部を認識する（あるいは外部通りに認識する）と主張することが可能となる。すなわち、認識手段と結果の向かう先にズレがなくなる。

いっぽう、ダルマキールティにとって、問題は単純ではない。というのも、PS I 9dでの経量部は、経量部$_2$であって、経量部$_1$ではないからである。すなわち、対象認識ではなく自己認識が結果である。したがって、認識手段である〈対象の形象を持つこと〉と同じ対象に向かっているというためには一工夫が必要である。それを端的に表すのが「対象認識はそれ（自体認識）に他ならないと認められた」(348a: arthasaṃvit saiveṣṭā)および「自己認識であるが対象認識だと認められた」(349d: svavid apy arthavin matā)という規定方向を逆にする二文（対象認識⇆自己認識）である。

経量部$_1$	対象の形象を持つこと	外界対象認識
経量部$_2$	対象の形象を持つこと	自己認識（≈外界対象認識）

本当は自己認識が結果であり、その意味では、「対象それ自体が見られるわけではない」(348b)が、外界が内部で展開しありのままのものとして確定されるという意味で「対象の確立はそれ(自己認識)を本質とするので」(349c)、外界対象を認識していると言ってもよいという趣旨である。本来、経量部(経量部$_1$）であったPS I 9dを、経量部$_2$からのものと解釈することで生じた齟齬を回避するという仕事をダルマキールティは抱え込むことになったのである。それが長々しい後半部(PV III 347cd-352)の理由説明である。

また下線部にあるように、pramīyateはniścīyateと言い換えられている。「外界の通りに私は認識している」というのは、実際には、対象認識ではなく対象確定である。ダルマキールティが、対象確定を視野に収めることで、

うまく対象のズレを回避する方向へと持っていこうとするのが確認できる。ただし、ダルマキールティは、この対象確定への読み替えについてPVでは説明していない。ジネーンドラブッディは、それについて、ダルマキールティの意図（特にPVin）を汲みながら[24]、次のような「自己認識⇒対象確定」という因果関係を想定し、転義的表現の裏付けを行っている。

外的形象　≈　内的形象

対　象　→　自己認識　→　外界対象確定

(≈外界対象認識)

ディグナーガは上述のように外界対象認識を念頭に置き「それ（対象の現れを持つこと）によって［外界対象が］認識される」とⅠ 9dで述べる。ジネーンドラブッディは「認識される」を「確定される」と読み替えることで、外界対象確定にまで視野を広げる[25]。さらに、「それによって」を「内的形象によって」と理解したうえで、「内的形象を手段とする自己認識によって」と解釈しなおす[26]。これにより全体としてⅠ 9dは、ジネーンドラブッディによれば「内的形象を手段とする自己認識によって［外界対象が］確定される」との趣旨となる。ディグナーガの経量部$_1$の記述は、これにより、経量部$_2$についての記述と読み替えられることになる。

ただしダルマキールティは、「自己認識がそのまま対象確定である」(339cd)と述べ、また、「対象の確立はそれ（自己認識）を本質とする」(349c)と明言している。したがって、自己認識と外界対象確定の因果関係については、むしろ、同じものと考えていたようである。

クマーリラのŚV pratyakṣa 79

以上で得られたPS(V)とPVとの対応表に、クマーリラのPS Ⅰ 9批判であるŚV pratyakṣa 79を組み込んでみる。

PS(V)	ŚV	PV III		
I 9a	79a	320-337	唯識	自己認識が結果
		338	経量部$_2$	自己認識が結果
I 9b	79b	339-340	唯識	対象確定＝自己認識
		341-345	経量部$_2$	自己認識に従って対象確定
I 9c	79c	346	経量部$_2$	対象形象を持つことが認識手段
I 9d	79d	347-352	経量部$_{2(\approx 1)}$	対象認識＝自己認識

すぐに分かるように、PS とŚV はきれいな対応を見せる。

PS I 9:
svasaṃvittiḥ phalaṃ vātra, tadrūpo hy arthaniścayaḥ/
viṣayābhāsataivāsya pramāṇaṃ, tena mīyate//

ŚV pratyakṣa 79:
svasaṃvittiphalatvaṃ tu tanniṣedhān na yujyate/
pramāṇe viṣayākāre bhinnārthatvān na mucyate//(27)

「自己認識が結果である」とするディグナーガのI 9a にたいしてクマーリラは「自己認識が結果であることは」と79a で受け、ディグナーガが述べる理由のI 9b にたいしては「それを［後で］否定するから」と79b で理由を退ける。以上は唯識説批判である。次に、経量部説について説明するディグナーガが「対象の形象を持つことが認識手段である」とI 9c で述べたのを受けてクマーリラは「対象の形象が認識手段である場合には」と79c で述べ、ディグナーガの理由説明であるI 9d の「それ（対象の形象を持つこと）によって［外界対象を］認識する［から］」に対しては、79d で「異なる対象を持つことから逃れられない」と、認識手段と結果の対象のズレを持ち出して批判する。

ダルマキールティは、PV III 320-337およびPV III 338で、外界対象認識ではなく、自己認識が結果であることを論証する。この箇所での議論が長いことは、クマーリラの自己認識批判（ŚV pratyakṣa 79b では予告のみで実際には後にŚV śūnya で展開される）を念頭に置いたものとして考えることで

合点がいく。クマーリラはディグナーガが想定する経量部（＝経量部$_1$）の単純な外界対象認識説を批判した。内的形象を認める以上、経量部$_1$の外界対象認識説は、認識手段と結果とで対象にズレが生じてしまう。すなわち認識手段が外界を対象とするのにたいして、結果である認識は、内的な形象を相手にすることになるのである。

ダルマキールティが PV III 320-337で展開するのは、経量部の外界対象認識説への批判である。そして、続く338でダルマキールティは、経量部$_2$の外界対象認識説（ただし直接に外界に接するわけではなく自己認識を結果とする）を認める。とすると、PV III 320-337で批判されていたのは、経量部$_2$ではなく、経量部$_1$の単純な外界対象認識説ということになる。つまり、ダルマキールティはクマーリラの批判を受け入れ、経量部$_1$の立場を不十分なものとして意識し、ディグナーガになかった経量部$_2$を導入し、ディグナーガの中に読み込んだと考えられる。こうしてダルマキールティは、PS I 9b の注釈として、唯識・経量部$_2$の立場をそれぞれ PV III 339-340, 341-345で説明することになるのである。

次に I 9c の注釈として PV III 346を述べた後、I 9d に対して PV III 347-352で長い議論を展開する。ディグナーガは PS(V) I 9cd では「外界対象通りに認識するので、対象の現れを持つことが認識手段であり、対象認識が結果である」という趣旨を述べる。意図するところは、認識手段と結果とは共に外界対象に向かっているので対象にズレはないということである。これをクマーリラは、経量部の内的形象の構造から「(経量部の立場では) 異なる対象を持つことから逃れられない」と本質的に批判した。

これにたいしてダルマキールティは長い議論をもって答えていると見なせる。ディグナーガの PS(V) I 9d において viṣayabheda という言葉が表面上には現れてこないにもかかわらず、その注釈である PV III 350ab に tasmād viṣayabhedo ’pi na とあるのは、ŚV pratyakṣa 79d: bhinnārthatvāt を考慮することで合点がいくのである。ここでダルマキールティは、いわば世俗的な立場において外界対象確定を結果とすることに問題はないとする。これにより「本性を考察する場合」での本当の経量部説として経量部$_2$を立てながらも、ディグナーガの経量部$_1$を救う配慮を見せているのである[28]。

結びにかえて

なぜダルマキールティはディグナーガになかった経量部$_2$を導入したのか。その契機はクマーリラによるディグナーガ批判にあったと考えられる。まず、認識手段と結果とのズレを問題にして他学派（例えばニヤーヤ学派）を批判したのはディグナーガ自身である。

PSV ad I 19 (9,4-5):
na hy anyaviṣayasya pramāṇasyānyatra phalaṃ yuktam.
なぜならば認識手段がXを対象とするのに、その結果が［Xとは］別のYを［対象とするのは］理に合わないからである。

この批判の矛先をクマーリラは、ディグナーガの経量部説に向け返した。有形象認識説に立ち、内的形象を立てる以上、認識手段と結果とが「異なる対象を持つことから逃れられない」と。この批判をダルマキールティは正当なものとして受け入れる。その結果として導入されたのが、自己認識を結果として認めるという大胆な経量部説（経量部$_2$）である。したがってダルマキールティにおいては、経量部の有形象認識説に立ちながらも、認識手段と結果との対象のズレを回避する方途が模索された。

本当の意味では、すなわち、「本性を考察する場合には」(PV III 350c)認識が光り輝くのみであり、そこでは自己認識しかない。認識手段と結果の区別がそもそもナンセンスである。したがって対象のズレということも問題にならない。これは、いわば勝義の立場である。

いっぽう外界対象の確立は自己認識を本質とするので、本当は自己認識であっても、対象認識と言ってもよい(349cd)。認識原因という意味では外界対象を認識対象と認めてもよいからである(351)。これによれば、〈対象の現れを持つこと〉という認識手段と、本当は自己認識であるが対象認識とも認められる結果は、同じ外界対象を対象とすることになる。これは、いわば世俗の立場である。

	認識手段	結果
勝義	対象の現われを持つこと	自己認識
世俗	対象の現われを持つこと	外界対象認識

自己認識ではなく外界対象認識を結果とする経量部$_1$の立場は、PV III 320-337においては批判され擁護されないままであった。いっぽう「本当は自己認識であるが外界対象認識と見なしてもよい」という論法は、経量部$_1$を擁護する防護壁となる。経量部$_1$は世俗として保護されるのである。

クマーリラの指摘が含意したように、有形象認識論に立つ以上、経量部において本当は自己認識が結果であり、直接に外界が認識されるわけではない。その意味で「自己認識が結果である」と公言するのが正しい。認識の対象は内的でしかありえない。しかし同時に、認識手段と結果との対象をともに外的とするかのようなディグナーガの経量部$_1$の記述を会通する必要が註釈者にはある。そこで、経量部における対象のズレの問題を回避するために、「自己認識＝外界対象認識」という等式（転義的用法を通じた等価式）をダルマキールティは導入した。対象をともに外的であると表現することは、世俗の範囲内で許されるのである。デーヴェーンドラブッディがPV III 338に二つのレベルを認め、経量部$_1$を世俗の立場として読み込んだように、「外界対象認識が結果である」と宣言することも可能なのである。

	認識手段	結果	
経量部$_1$	対象の現われを持つこと	外界対象認識	転義的
経量部$_2$	対象の現われを持つこと	自己認識	勝義・本性考察上
唯識	把握主体の形象	自己認識	勝義

経量部$_1$だけを想定するディグナーガにたいして、クマーリラは本質的な「対象のズレ」を指摘した。クマーリラの批判を受け入れてダルマキールティは、「本性を考察する場合」（いわば勝義）には認識の対象が内的であり、それゆえ、経量部においても本当は自己認識が結果であることを認めた。が同時に、経量部$_2$とは別に（いわば世俗として）経量部$_1$を保護することでディグナーガの会通を試み、対象のズレを解消し、クマーリラの経量部批判を回避した。

略号表および参照文献

Tattvasaṅgrahapañjikā

TSP　*Tattvasaṅgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary Pañjikā of Shri Kamalashīla.* 2 vols. Ed. Dwarikadas Shastri. Varanasi: Bauddha Bharati, 1981, 82.

Pramāṇavārttika

PV　PV III のテクストは戸崎［1979］［1985］に従う。

Pramāṇavārttikālaṃkāra

PVA　*Pramāṇavārtikabhāshyam or Vārtikālaṅkāraḥ of Prajñākaragupta.* Ed. Rāhula Sāṅkṛityāyana. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1953.

Pramāṇasamuccaya(*vṛtti*)

PS(V) *Dignāga's Pramāṇasamuccaya, Chapter* 1. *A hypothetical reconstruction of the Sanskrit text with the help of the two Tibetan translations on the basis of the hitherto known Sanskrit fragments and the linguistic materials gained from Jinendrabuddhi's Ṭīkā.* (http://ikga.oeaw.ac.at/Mat/dignaga_PS_1.pdf で公開)

Pramāṇasamuccayaṭīkā

PSṬ　*Jinendrabuddhi's Viśālāmalavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā. Chapter 1, Part I: Critical Edition.* Ed. Ernst Steinkellner, Helmut Krasser, Horst Lasic. China Tibetology Publishing House, Austrian Academy of Sciences Press, 2005.

Ślokavārttika

ŚV　*Ślokavārttika of Śrī Kumārila Bhaṭṭa*. Ed. Swāmī Dvārikadāsa Śāstrī. Varanasi: Tara Publications, 1978.

Hattori, Masaaki (服部　正明)

1968　*Dignāga, On Perception*. Cambridge: Harvard University Press.

Iwata, Takashi (岩田　孝)

1991　*Sahopalambhaniyama.* Stuttgart: Franz Steiner.

Kataoka, Kei (片岡　啓)

2009　「『集量論』I 9解釈の問題点――ディグナーガとジネーンドラブッディ――」,『印度学仏教学研究』58-1, 455(106)-449(112).

2010　「認識手段と結果との対象の相違――クマーリラとダルマキールティ――」,『印度学仏教学研究』59-1, 418(115)-412(121).

Katsura, Shoryu (桂　紹隆)

1987　「因明正理門論研究［七］」,『広島大学文学部紀要』46, 46-65.

1988　「ディグナーガの認識論と論理学」,『講座大乗仏教9　認識論と論理学』(春秋社), 103-152.

Kellner, Birgit

2010　"Self-Awareness (*svasaṃvedana*) in Dignāga's *Pramāṇasamuccaya* and *-vṛtti*: A Close Reading." *Journal of Indian Philosophy,* 38, 203-231.

Kobayashi, Hisayasu (小林　久泰)

2006 「認識手段・認識結果の非別体性：プラジュニャーカラグプタの PV III 319解釈」,『比較論理学研究』4, 43-50.
2009 「認識結果としての自己認識」,『日本西蔵学会々報』55, 121-130.
Moriyama, Shinya (護山　真也)
2010 "On Self-Awareness in the Sautrāntika Epistemology." *Journal of Indian Philosophy*, 38, 261-277.
Murakami, Atsuki (村上　徳樹)
2006 「所取の形象と能取の形象についてのケードゥプジェの解釈」,『日本西蔵学会々報』52, 3-12.
2008 「rang rig pa に関するケードゥプジェの解釈」,『日本西蔵学会々報』54, 17-31.
Taber, John
2005 *A Hindu Critique of Buddhist Epistemology*. London and New York: Routledge Curzon, 2005.
Tosaki, Hiromasa (戸崎　宏正)
1963 「仏教論理学説と経量部説――量・量果の非別体説について――」,『印度学仏教学研究』21(11-1), 187-190.
1968 「仏教論理学説と経量部説(5)――「量果＝自証」説について」,『印度学仏教学研究』33(17-1), 70-73.
1979 『仏教認識論の研究』上. 東京：大東出版社.
1985 『仏教認識論の研究』下. 東京：大東出版社.
1992 「クマーリラ著『シュローカヴァールティカ』第４章(知覚スートラ)和訳(2)――認識手段とその結果――」,『成田山仏教研究所紀要』15 (仏教文化史論集Ⅰ), 303-317.

注

* 草稿に目を通し助言を戴いた稲見正浩・護山真也・渡辺俊和，各氏に感謝する。

(1) PS I 9c: viṣayābhāsataivāsya pramāṇam は厳密には I 9cd であるが，本稿では便宜的に I 9c と呼ぶ。

(2) 最新の研究として Kellner [2010]がある。そこに関連する先行研究も挙げられている。

(3) PSṬ 69,4-6: ato nārthasya yathāsvabhāvaṃ niścayaḥ śakyate kartum iti *sandadhāno bāhyetarapakṣayor ekenaiva sūtreṇa phalaviśeṣavyavasthāṃ cikīrṣur āha－svasaṃvittiḥ phalaṃ vātreti. pūrvaṃ viṣayasaṃvittiḥ phalam uktā. ato vikalpārtho vāśabdaḥ. (*校訂本の sandhāno を sandadhāno に訂正する。もし現在分詞ではなく名詞であれば sandhānam と中性になるはずである。)「それゆえ対象は，その自体通りに確定することができないものであるということを意図しながら，外界実在論と外界否定論の［いずれにも共通するものとして］，同じ一つのスートラでもって，［前とは異なる］特定の結果の設定を為そうとしながら［ディグナーガは］言う――「あるいはここで自己認識が結果である」と。前では対象の意識が結果だと述べられた。それゆえ「あるいは」という言葉は任意選択を意味する。」

(4) PSṬ 71,12-72,2: ihāsati bāhye 'rthe svasaṃvedanaphalavyavasthāyāṃ grāhakākārasya prāmāṇyaṃ vakṣyati. tataś cāsati bāhye 'rthe prameye yathā svasaṃvedanaphalavyavasthāne grāhakākāraḥ pramāṇam iṣṭam, tathā sati bāhye 'rthe prameye grāhakākāra eva pramāṇam ity āśaṅkā syāt. atas tannirāsāyāha — yadā tv ityādi. bāhye prameye svasaṃvedanaphalavyavasthāyām api viṣayābhāsataiva jñānasya pramāṇam iṣyate, na tu vijñaptimātratāvad grāhakākāraḥ.「ここで，外界対象が存在しない場合に自己認識を結果として立てる場合には，把握主体の形象が正しい認識の手段であることは後述する。そしてそれゆえ，外界対象が正しい認識の対象として存在しないので，ちょうど，自己認識が結果として立てられる場合に，把握主体の形象が正しい認識の手段として認められるように，外界対象が正しい認識の対象として存在する場合には，やはり把握主体の形象が正しい認識の手段となるのではないかという疑問がありうる。それゆえ，そのような［疑問］を排するために［ディグナーガは］言う――「いっぽう…場合には」云々と。外界のものが正しい認識の対象である場合，自己認識を結果として立てていても，認識が対象の現われを持つことだけが，正しい認識の手段と認められるのであって，唯識のように，把握主体の形象が［正しい認識の手段と認められるわけ］ではない。」同様の趣旨はデーヴェーンドラブッディに見られる。戸崎［1985:38, n.147］を参照。

(5) この解釈がディグナーガの原文に照らして不自然であることについては片岡［2009］を参照。

(6) 本稿ではダルマキールティとジネーンドラブッディに即した戸崎［1979］［1985］の見解を代表例として取り上げる。Iwata［1991］も含め，諸解釈についてはKellner［2010: 224-225］に挙げられている。Hattori［1968:102］は，I 9bを唯識**のみ**に帰しているようである。Hattori［1968:102］: "In his own commentary on *k. 9b*, which follows the above passage, he refers to two different theories: the one recognizing the object as *saviṣaya-jñāna,* and the other as *bāhyārtha*. Evidently, they are respectively the theories of the Yogācāras and the Sautrāntikas." Kellner［2010:224］はHattori［1968:102］の解釈を "Textually, this means that he regards PS(V) I.9ab as referring only to internalism"として批判している。しかし，"even the Sautrāntikas will accept the theory that *sva-saṃvitti* is the *pramāṇa-phala*" というHattori［1968:102］記述からすると，Hattori［1968］は，I 9aは唯識と経量部に共通と考えている様子である。Hattori［1968］が唯識のみに帰したのはPS(V) I 9abではなくPS(V) I 9bであると批判点を訂正すべきではないだろうか。

(7) 戸崎［1985:3-21］の分節・和訳を参照したが全同ではない。

(8) 戸崎［1985:24, n.83］が指摘するように，PV III 340の位置づけに関して注釈者の意見は分かれる。339への戸崎［1985:23, n.80］の指摘も併せて整理すると以下のようになる。

PV III		339	340
Devendrabuddhi	630-690	唯識	唯識
Śākyabuddhi	660-720	唯識	唯識
Jinendrabuddhi	710-770	(唯識)	(唯識)

Prajñākaragupta	750-810	(唯識)	**経量部$_2$**
Ravigupta	9c 初頭	唯識	経量部$_2$
Manorathanandin	11c 後半	唯識	経量部$_2$

表から分かるように，340を切り離して経量部$_2$に帰属させるのはプラジュニャーカラグプタの解釈である。彼以降に導入された新たな解釈と容易に予想できる。プラジュニャーカラグプタは唯識に二説を認める。それは，唯識においても，自己認識ではなく対象認識が結果だと考えうるとする立場である。このような解釈は，PV III 339への注釈に見られる。プラジュニャーカラグプタ（そしてラヴィグプタ，cf. 戸崎［1985:23, n.80］）は，PV III 339の唯識の立場を「対象認識が結果である」とする立場と解釈する（小林［2009:124］）。そして，PV III 340については，続く経量部$_2$の側に組み込む（小林［2009:126］）。また338については yadā niṣpannatadbhāvaḥを yadā'niṣpannatadbhāvaḥ と否定に読み替えることで，唯識$_1$の立場を表明したものと解釈する（村上［2006］）。すなわち，プラジュニャーカラグプタの解釈は以下のようになる。

PV III	立場	認識手段	結果
338	唯識$_1$	把握主体の形象	自己認識
339	唯識$_2$	把握主体の形象	**対象認識**
340-345	経量部$_2$	対象の形象を持つこと	自己認識

(9)「なぜならばそれ（自己認識）［に従った］形で対象が確定されるからである。というのも，対象を伴った認識が対象である場合には，自己認識に従って対象を［人は］理解するからである。望ましいものとして，あるいは，望ましくないものとして。」ただし，ダルマキールティのここでの解釈に従えば第一文は「なぜならばそれ（自己認識）を本質とするのが対象確定だからである」となる。

(10)「対象を伴った認識が［対象である］――というのも認識の一部を対象として立てるからである――場合には，［認識］それ自体の経験がそのまま対象確定である。」

(11)「これ（認識）の自体が望ましい形象を持ったものとして，あるいは，それとは異なる形で［望ましくない形象を持ったものとして］経験されると，望ましいもの，あるいは，望ましくないものとして，対象が，それ（認識）により，認識させられたことになる。」なお，戸崎［1985:25］は，tena ... praveditaḥを「かれによって…知られる」と解釈するが，praviditaḥではなく praveditaḥと使役である以上，不可能である．tena は，マノーラタナンディンの言うように，jñānena と解釈するしかない。

(12) 明らかに自己認識のケースと分かる場合，すなわち，認識が認識対象である場合だけでなく，一見して外界対象が認識されていると思われている場合，すなわち，青のような対象が認識対象である場合も，自己認識が結果である，というものが，ジネーンドラブッディによる解釈の趣意である。注意すべきは，「対象とともに認識が」とあったのが「認識とともに対象が」と順序がすり替わっているいることである。すなわち，ディグナーガの原文(saviṣayaṃ jñānam)において認識が主であり対象が従であったのにたいして，ジネーンドラブッディの求める意味においては主従が逆転し，認識が従

であり対象が主となってしまっているのである（片岡［2009:453(108)］参照）。ディグナーガに無理な解釈を施したために生じた帰結である。PSṬ 71,9-11: ata etad uktaṃ bhavati. na kevalaṃ yadā jñānaṃ pramāṇasya prameyam apekṣate, tadā svasaṃvedanānurūpam arthaṃ pratipadyata iti svasaṃvittiḥ phalam, api tu yadāpi viṣayam, tadāpīti.「それゆえ次のことが［ディグナーガにより］言われたことになる――〈認識手段の対象〉として［人が］認識に依拠する場合，自己認識に沿った形で対象を理解するので自己認識が結果である。しかし単にその場合だけでなく［認識手段の対象として］対象に［依拠する］場合も［自己認識が結果である］――と。」

(13) 脚注(9)参照。

(14)「外界対象が存在する場合でも，ただ経験の通りにそれ（対象）は，その自体が確定されるのであって，それ自体の［客観的な］あり方によってではない。複数の自体を持つことになってしまうからである。」

(15)「それゆえ外界のものが認識対象である場合でも，［認識］それ自体の経験が結果であるとするのが理に適っている。というのも，それ（認識）の本性の通りにのみ，対象が確定されるからである。」

(16)「あるいはここ（知覚）で自己認識が結果である。なぜなら認識は二つの現れを持つ――それ自身の現れをもつ，また，対象の現われをもつ――からである。二つの現れを持つその［認識］の自己認識が結果である。」Kellner［2010:221］は，「認識は，二つの現れを持つもの**として**自分自身を自覚する」(cognition to be aware of itself as having both appearances)という解釈の可能性を考え，「二つの現れを持つものとしての認識自体を自覚する」(cognition is just aware of itself as having both appearances—it is aware of itself as somehow encompassing both aspects)のか，あるいは「二つの現れのそれぞれを自覚する」(or it also has access to both these appearances)のかという二つの可能性を考えている。後者であれば，把握主体と把握対象とが共に自覚されるということになる。しかし，筆者は従来の通常の解釈と同じく，認識の内部を微細に見た際に二つに分かれる一方の側面である把握主体が，もう一方の側面である把握対象を捉えるという事態が，(認識の内部を覗きこまずに少し離れて見た際に）全体として自己認識と看做されることになると解釈する。言い換えれば，ここでディグナーガは「認識が認識それ自体を捉える」という自己認識のモデルと，「認識が把握主体（それ自体の現れ）と把握対象（対象の現れ）とに分かれる」という二面性のモデルとを合わせた形で表現しているのである。遠近の二つの異なる視点を合わせて表現したがために，解釈者を惑わせるものとなっている。

(17)「そのあり方が，望ましいものあるいはまた望ましくないものとして既に出来上がっている他（認識とは異なるものである外界対象）が認識原因として対象である場合，［直接には］それ（認識）を経験するのであり，かつ，その通りに［望ましいものあるいは望ましくないものとして経験するのである］。」

(18)「いっぽう外界のものに他ならない対象が認識対象である場合には，これ（認識）が，対象の現れを持つことのみが認識手段である。というのもその場合，認識によって自

己認識されるにもかかわらず，[そのような認識] それ自体を考慮することなく，これ (認識) が〈対象の現れを持つこと〉だけが，認識手段だからである。」

(19)「その場合，これ (認識) が〈対象の現れを持つこと〉だけが認識手段なのであって，存在するにもかかわらず，把握主体としての自体は，別の対象を持つので，外界対象に関しては，[認識手段として] 考慮されることがない。」

(20) Hattori [1968]の翻訳は，jñānasvasaṃvedyam ではなく jñānaṃ svasaṃvedyam という異なる読みを前提にしているが，内容的には大差ない。Hattori [1968:29]: "For, in this case, we overlook the true nature of the cognition as that which is to be cognized by itself, and ... ." この箇所を念頭に置いたと思われるのが以下（特に太字部分）の Hattori [1968]の解説である。Hattori [1968:105]: "If it is the case that the cognition of a pot is cognized, then there must be, immanent in the cognition, the self-cognizing faculty, which functions as *pramāṇa*, taking the pot-formed cognition for *prameya* and producing *sva-saṁvedana* as *phala*. This is how the Yogācāras explain the theory of *sva-saṁvitti*. However, the Sautrāntikas have a limitation: they uphold the doctrine that *prameya* is an external thing. If the Sautrāntikas, in concert with the Yogācāras, had recognized the self-cognizing faculty, i.e., *svâbhāsa*=*grāhakâkāra*, as *pramāṇa*, their doctrine would have been violated, because *grāhakâkāra* does not take the external thing for *prameya*. Accordingly, within the doctrinal limitation of the Sautrāntikas, Dignāga considers that the cognition's taking the form of an object (*viṣayâkāratā*) should be regarded as *pramāṇa*, the external object being cognized by means of it and it being self-cognized. **However, Dignāga remarks that the essential nature of the self-cognizing cognition is disregarded in the justification of the Sautrāntika doctrine.**"

Hattori [1968]は太字部分において，「ディグナーガは経量部説を正当化するにあたっては，把握主体部としての認識の本質的なあり方が無視されると断っている」と述べている。すなわち，結果については唯識と共通して自己認識が結果として立てられるが，認識手段については違う，唯識的な立て方は無視されるということをディグナーガが注記していると解釈しているわけである。認識手段についても唯識と同じように見分，すなわち，認識の中の把握主体部が相当すると認めたならば，外界対象ではなく認識内の相分が対象となってしまうので，経量部の外界対象認識説の前提が崩れてしまうことになるというのが，Hattori [1968]の言うところの「経量部説の限界」である。ここで「ディグナーガが断っている」と言う時，Hattori [1968]が念頭に置いたであろう一文は，現在の jñānaṃ svasaṃvedyam (or jñānasvasaṃvedyam) api svarūpam anapekṣya しかありえない。同じ内容は Hattori [1968]の別の注記でも繰り返される。Hattori [1968:102]: "The ability to cognize itself or *svâbhāsa* (=*grāhakâkāra*) of the cognition is disregarded by the Sautrāntikas, and ... ." しかし，ディグナーガの原文を見る時，ここでディグナーガが「無視する」としたのは，自己認識されるものとしての認識それ自体であって，唯識において認識手段として立てられる把握主体部としての認識（見分）ではない。jñānaṃ svasaṃvedyam (or jñānasvasaṃvedyam) api svarūpam

anapekṣya という原文は，いずれの読みを採用するにしても，grāhakāṃśa について語っているものではありえない。なぜならば明らかに自己認識される対象としての認識それ自体について語っているからである。Hattori [1968]の問題点は，ダルマキールティ，そしてそれを受けたジネーンドラブッディの解釈を，ディグナーガ自身の中に読み込む点にある。ジネーンドラブッディに沿って読み変えた場合，「認識にとり自己認識されるにもかかわらず，[認識] それ自体 [である見分＝それ自身の現れを持つこと] を無視して，[相分である]〈対象の形象を持つこと〉が認識手段である」となるだろう。ここでは，見分という自体(svarūpam)が「認識にとり自己認識される」(jñānasvasaṃ-vedyam)ということになる。しかし，このような表現自体，ディグナーガの体系の中では奇妙である。本来，見分が相分を捉えることそれ自体が自己認識であって，見分が捉えらえるというようには通常，表現しないからである。jñānasvasaṃvedyam を jñānena svasaṃvedyam というように「見分が認識により自己認識される」というように明瞭に主体を打ち出すことをためらい，jñānasya svasaṃvedyam と，jñāna と見分との関係を曖昧なままに留める二次的な解釈をジネーンドラブッディが施した (PSṬ 72,5: jñānasya svasaṃvedyam iti vigrahaḥ) のも，そこに理由がありそうである。

(21)「なぜならば，その対象が，それ (対象の形象を持つこと) によって認識されるからである。というのも，XやYという形で――白・黒として――対象の形象が認識に入り込むと，その対象は，それぞれXやYという形を持ったものとして [その通りに] 認識されるからである。」

なお，ここで，具体例として挙げられる śubhrāśubhrāditvena について，校訂テクストにはśubhāśubhāditvena とあるが訂正した。チベット訳はいずれも「白・非白」と解釈している。つまりśubhra/aśubhra を念頭に置いている．PS(V)のサンスクリット還元の主要情報源であるジネーンドラブッディの PSṬ の対応箇所 (PSṬ 72,14-15) には，śubhāśubhādirūpeṇa, śubhāśubhādirūpādiḥとある。Diplomatic edition にあるように写本も同様である (写本については校訂者の一人である Helmut Krasser 氏に再度確認して戴いた)。決定的なのは，ジネーンドラブッディが後者において明らかに rūpa という語を補っていることである。(前者の-rūpeṇa はディグナーガの-tvena を受けたものであり，「～として」程の意味の可能性がある。) すなわち，ここでジネーンドラブッディは「白色・黒色」と解釈していると考えられる。つまり，śubhra/aśubhra という読みを前にしていたと推測できる。逆に，「善色・不善色」「浄色・不浄色」あるいは「美醜の姿」というのは考えにくい。つまり，śubha/aśubha という読みを前提にしていたとは思われない。筆者としては PSṬ も併せて訂正する必要があると考える．(ただし PSṬ チベット訳は śubha/aśubha を前提にしている。) その他，関連する情報を挙げておく。

Hattori [1968:243]の PS(V)再構成: śubhrāditvena
Hattori [1968:29]の英訳: as, for example, something white or non-white
戸崎 [1985:2] の和訳：白，非白等として

Kanakavarman (Hattori [1968:182): dkar po daṅ dkar po ma yin pa la sogs pa ñid
Vasudhararakṣita (Hattori [1968:183): dkar po daṅ dkar po ma yin pa la sogs pa ñid
PSṬ Tib: sdug pa daṅ mi sdug pa la sogs
TSP ad 1327-28, 483,24: śubhrāditvena (Patan f.185r16, Jaisalmer f.159b3も同様)
(Tib: dkar ba la sogs pa ñid du)
PVA 393,30: śubhāditvena (但し写本の f.198b7は śubhrāditvena)

PVA のチベット訳は śubha を前提にしているようであり，註釈者であるジャヤンタとヤマーリの読みと解釈も，こちらを支持しているようである。歴史的に，二つの読みがサンスクリット伝承にも存在していた可能性がある。

通常，śubha/aśubha の対立は，ヴァスバンドゥの『倶舎論』に見られるように，kuśala/akuśala と同義で用いられる。しかし現在の文脈で「善色・不善色」をどのように理解すればよいのであろうか。sita/asita という一般的な「白・黒」の表現と同様，ここでも，「白・黒」を意図してディグナーガが śubhra/aśubhra という表現を用いたと筆者は考える．外界対象が「[入り込んできた] その通りに認識される」(yathā yathā ... tattadrūpaḥ ... pramīyate) という現在の文脈からは，白色が白色として，黒色が黒色として認識されるという引例が最適である。逆に，iṣṭa/aniṣṭa と同様に主観的な意味で解釈しようとすれば，主観的な「美・醜」という意味で śubha/aśubha のほうが都合がよいだろう。śubha/aśubha という読みを前提とする一部の伝承は，そのような「主観的」理解を念頭に置いていたのかもしれない。しかし，ディグナーガが主観的な意味でわざわざ śubha/aśubha を引いたであろうか。その場合には，iṣṭam aniṣṭāṃ vā という表現を用いるのではないだろうか。

またここで，A B vāという表現ではなく，A-B-āditvena (あるいは A-āditvena) という表現を用いていることにも注意する必要がある。ここでは，A は A として，B は B として理解されるという意図が明瞭である。逆に「望ましい」「望ましくない」であれば，全く主観的である。同一のものが「望ましい」場合もあり，他の人にとっては「望ましくない」場合もある。同一物が「A や B」(A B vā) となる。同一対象 (例えば不浄観で挙げる例としての女性) が「美や醜」と主観的に理解されるならば，śubhāśubhāditvena と表現するよりも，śubham aśubhaṃ vāと表現したほうが分かりやすい。いっぽう「白黒」であれば，同一対象が人によって白と理解されたり，黒と理解されたりすることはない。「主観的」な解釈は，ディグナーガの原文に即さない。(チベット訳他，参照資料に関して稲見正浩，渡辺俊和から多くの教示を受けた。記して感謝する。)

(22)「なぜならば，Xという形で，その対象自体が認識に入り込むと，その通りに確定されるからである。というのも「これ (対象) がこの通りに入った」と自己認識があるからである。したがって，対象認識は [実は] それ (自己認識) に他ならないと認められる。なぜならば，対象それ自体が知覚されることはないからである。」

(23)「対象の確立はそれ (自己認識) を本質とするので，自己認識であるにもかかわらず対象認識だと認めらる。それゆえ対象のズレもない。」

(24) PV III 349cd: arthasthites tadātmatvāt svavid apy arthavin matāが，PVin 37,5-6では arthasthiteḥ svasaṃvedanarūpatvāt svavid apīyam arthavid eva **kāryato** draṣṭavyāと，kāryataḥという因果関係を示す語が付加されている。この点については護山真也の教示を受けた。

(25) PSṬ 72,10: mīyata iti niścīyate.「認識されるとは確定される［という意味である］。」

(26) PSṬ 72,13-73,2: yady api so 'rthas tena mīyata ity ucyate, tathāpi tatsādhanayā svasaṃvideti veditavyam. tathā hi yathā yathārthākāro jñāne sanniviśate śubhrāśubhrādirūpeṇa (śubhrāśubhrādirūpeṇa] *emend.*; śubhāśubhādirūpeṇa *ed.*), tathā tathā svasaṃvittiḥ prathate. yathā yathā ca sā khyāti, tathā tathārtho niścīyate śubhrāśubhrādirūpādiḥ (śubhrāśubhrādirūpādiḥ *emend.*; śubhāśubhādirūpādiḥ *ed.*). yadi hi tadākāram utpannaṃ syāt, tadā tādṛśasyātmanaḥ saṃvittiḥ syāt. tataś ca tadvaśād viṣayaniścayo bhavet, nānyathā.「たとえ「その対象がそれ（対象の形象）によって認識される」と言われていても，それ（対象）を実現手段とする自己認識によってと理解すべきである。すなわち，XやYとして――［例えば］白・黒などとして――対象の形象が認識に入り込んでくるとそれに応じて，自己認識が展開する。またそれ（自己認識）が現出するのに応じて，白・黒などの色などという対象が確定される。なぜならば，もしそのような［白・黒等の色等という］形象をもって［認識が］生じたならば，それに応じた［認識］自体の意識（＝自覚）があるはずであり，その後，それ（認識自体の意識）のおかげで，対象の確定があるはずであって，それ以外の仕方ではないからである。」

(27)「いっぽう自己認識が結果であることは，それ（自己認識）を［後から］否定するのでありえない。対象の形象が認識手段であるならば，［結果と］異なる対象を持つ［という過失］から逃れ［られ］ない。」

(28) ダルマキールティの本音は，もちろん，経量部$_1$ではなく経量部$_2$にある。さらに言えば，本当の勝義は唯識にあるので，経量部$_2$については「勝義」と呼ぶことは避け，「本性を考察する場合には」(350c: svabhāvacintāyām)という表現に留めたと思われる。いっぽうジネーンドラブッディは経量部$_2$と経量部$_1$の対立を，分かり易く勝義・転義の対立と表現している。PSṬ 73,9-10: kathaṃ tarhi svasaṃvittiḥ phalam uktam. paramārthatas tādātmyāt svasaṃvittiḥ phalam uktam. upacāreṇa tu kāryato 'rthasaṃvittir eva sā draṣṭavyety aviruddham.「【問】ではどうして［対象確定を結果とする対象認識ではなく］自己認識が結果だと［PS I 9aでディグナーガは］述べたのか。【答】［対象認識は］本当はそれ（自己認識）を本質とするので，自己認識が結果だと［I 9aで］述べたのである。しかし転義的には，それ（自己認識）は，結果［である対象確定］の点から対象認識に他ならないと見なされるべきなので，［I 9aとI 9dとは］矛盾しない。」cf. PVin 37,5-7.